

六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

野田秀樹 演出家

Hideki Noda / Director



CREATOR INTERVIEW ^{No} 73

野田秀樹 Hideki Noda

1955年、長崎県生まれ。劇作家・演出家・役者。東京芸術劇場芸術監督、多摩美術大学教授。東京大学在学中に「劇団 夢の遊眠社」を結成し、数々の名作を生み出す。92年、劇団解散後、ロンドンに留学。帰国後の93年に演劇企画製作会社「NODA・MAP」を設立。『キル』『パンドラの鐘』『オイル』『THE BEE』『パイパー』『ザ・キャラクター』『南へ』『エッグ』など次々と話題作を発表。故 中村勘三郎丈と組んで歌舞伎『野田版 研辰の討たれ』『野田版 鼠小僧』『野田版 愛陀姫』の脚本・演出を手がけるほか、海外の演劇人と積極的に作品を創作するなど、演劇界の旗手として国内外を問わず、精力的な活動を展開。09年10月、名誉大英勲章OBE受勲。09年度朝日賞受賞。11年6月、紫綬褒章受章。

突然やってきて夢のように消える
「文化サーカス」を東京から。

No
73

野田秀樹 演出家

Hideki Noda / Director

クリエイターインタビュー

「オリンピック後まで残る

「遺産(レガシー)」をつくるために」

photo_tsukao / text_kentaro inoue

「NODA・MAP」を率い、数々の話題作を発表、国内外で活躍する劇作家であり演出家・役者の野田秀樹さん。「六本木アートナイト 2016」に合わせて、多種多様なアーティストが出会い"文化混流"する新たなムーブメント「東京キャラバン in 六本木」を同時開催しました。東京キャラバンのリハーサル真っ只中の野田さんが語る未来の街、そして未来の文化のつくり方とは？

文化的な街をつくるために必要なこと。

日本の街って、どこも似ていますよね。旅公演をしていると、よくそう感じます。地方都市の駅前が全部一緒に見えるのは、そこにあるお店が一緒だから。海外にはチェーン店を入れるな、みたいに頑固な街づくりをしているところもあるように、いいか悪いかは別として、そういうやり方はひとつあるのかもしれない。

一方で、アートみたいに文化的なもので街づくりをしたければ、突出すれば形にはなると思うけれど、やっぱり上っ面になってしまいがち。というのも、日本にはアートに理解を示す人も少ないし、とくに政治経済関係の上の人間には、まったく興味がないことが多いから。しかも、急にそういうポジションになった人に限って、海外の劇場を観に行ったら、すぐオペラ好きになっちゃう(笑)。「あんだ、日本で何も見たことないだろう！」って。

今も、2020年の東京オリンピックに向けた文化的な活動がいろいろあるけれど、みんなが本当にそれに興味があって、本気でやりたいと思っているのか、というのが一番大事なところで。って、これ、半分グチになっていますけど。

1

コンテンツの「数」から「質」に戻ったほうがいい。

よく、いろんな街で「なんとかふれあいフェスティバル」みたいなイベントをやるでしょう？ たしかにある程度ワクワクするかもしれないけれど、日本の場合、だいたい子ども向け。ある年齢になって、ちょっと根性ひねくれてきた若いやつらが行くかっていうと行かない。どんなイベントにしても、コンテンツの取捨選択をする人の問題って、とても大きいと思うんです。

たとえば僕は、東京芸術劇場の芸術監督をしています。就任当時、公共劇場なので稼働率がどのくらいとか、会議でそういうことばかり気にして、内容は二の次になってしまっていた。芸術監督の仕事を一言でいうと、「こんな質の低いものはうちではやらないんだ」という頑固な姿勢かもしれない。最初にそう言ったら、公共の劇場でそんな例はないとか、なんで東京都のものを都民に自由に使わせないんだ、というクレームがくると。だったら「私が責任を取るってことで大丈夫ですか？」って説得した。つまり責任を被りたくない人が多いんです。

今回の六本木アートナイトにも、同時開催する「東京キャラバン in 六本木」をはじめ多くのプログラムがありますが、公共事業的にたくさん参加アーティストがいれば盛り上がっている、という考え方はしないほうがいいと思っています。みんな数よりも、一度「質」に戻るべき。

「色」を見せることに臆病になると文化の意味がない。

企画をするということは、自分たちが考えている「色」を見せること。そこで臆病になってしまうと、文化の意味がない。これが、日本が同じような街ばかりになってしまう理由でもあるんじゃないかな。もちろんクオリティクオリティとばかり言う必要ないけれど、最低、自分はこういうものが好きだっていうのを、はっきり通すことが必要でしょう。

ちなみに、東京キャラバンというのは簡単にいえば「文化サーカス」。最初は、東京オリンピックに向けた文化プログラムをつくらうという話からはじまったのですが、どうもそういう会議ってというのは抽象論が多くて。「日本という国は、伝統とモダンが溶け合っていて素晴らしい」とか、ごもっともなんですけど、じゃあ何をやるのっていうと、何も出てこない。

そこで週末、街角に突然ひょこっと文化サーカスみたいのが現れて、翌日の夜にはパフォーマンスを見せて夢のように消えた なんて体験があったら楽しいんじゃないかって。サーカスに限らず、自分の街に何かやってくるならうれしいでしょうし、わくわく感もあるでしょう？ もちろんコンテンツも大事だけど、そのプロセスだけでもけっこういいな、と。



東京キャラバン

「人と人が交わるところに『文化』が生まれる」をコンセプトに、多種多様なアーティストが集う文化ムーブメント。六本木アートナイト 2016 開催中、六本木ヒルズアリーナで行われた「東京キャラバン in 六本木」(写真上/撮影: 篠山紀信)には東京スカパラダイスオーケストラ、宮沢りえ氏などが参加。写真下は、2016年8月にオリンピック開催中のリオで行われたワークショップの様子。



野田秀樹 演出家
Hideki Noda / Director

photo_tsukao / text_kentaro inoue

どうやったらいいか、誰もわからないものを形にする。

やろうと言ってはみたものの、正直ちょっと大変だな、って最初のうちは言い出しっぺを後悔していたんです。そもそも初めてのことで、どうやったらいいのか誰もわからない。でも今は、いろんなものに会えて僕が一番得したなって気がしてます（笑）。今回の六本木についていえば、リオや東北を回って積み重ねたものがあるので、ある程度見えてもいます。

もちろん、ある種のマニュアルは必要でしょう。でも完全にマニュアル化されて、" それをやるためにやる " っていう形になったら、このキャラバンも方法を変えないといけない。昔話になりますけど、自分が持っていた劇団を解散した理由のひとつがそれで、芝居をやるために劇団をつくっていたはずが、いつの間にか劇団を転がすために芝居を打ち続けるようになってしまったんです。

そういう主客転倒が起こった瞬間にストップしなくちゃいけないし、どんなに勢いづいているものでも、その見極めをしないとおかしくなってしまう。ただ、人は食っていかなくちゃいけないから、そう簡単には言えないんですけど。

ビジュアルが強い時代だからこそ、大切にしたいのは言葉。

実際キャラバンでやっているのは、現地で出会った人や伝統的なものどうぶつつかって、組み合わせることができるかっていうこと。出たところ勝負型だから誰が参加してくれるかが一番大きくて、たとえば今回、スカバラさんが音楽をやってくれることで、びっくりするほど面白くなったり。単純なコラボレーションじゃなくて、ほんのひとつひねりできたら違うように見えるはず、という

のをいつも考えています。まだまだ道半ばですけど、「こういうふうにしていこうよ」というポジティブな姿勢を見てもらえたら。

アートもそうだし、フィジカルなものだとダンス、それからパフォーマンスを見てもそうですが、やっぱり今の時代って言葉がないんですよね。若い人はビジュアルには非常に強くなってきている、でも言葉が弱くなっている気がするので、そこに仕掛けていくことも意識しています。

今回もほとんどポエムみたいな感じで、そんなにストーリーがあるものではありませんが、ボブ・ディランもノーベル賞をとったことだし、詩も見どころということでひとつ（笑）。

人や体験や記憶を、オリンピックよりも、もっと先まで残すために。

東京キャラバンをオリンピック後の「遺産（レガシー）」にしたいなんて大きなことを言っていますが、キャラバン用の施設がつくられるわけじゃないので、場所さえあれば、ずっと続けられる。今回の六本木みたいに立派な舞台がなくても、「東京キャラバン in 東北」のように、小学校の体育館だってできないことはない。

ただひとつだけ、キャラバンのシンボルで、名和（晃平）くんが作った「エーテル」だけは、小さくても、どこにでも装置として象徴として持っていけたらいい。悲しいことに東北ではその予算すらもなかったけど それくらいですよ。

実際あとに残るものって、施設なんかじゃなくて、人だったり体験だったり記憶だったり、そちらのほうが大きい。東京オリンピックをきっかけにできた文化プログラムが形になって、ずっと残っていく。せっかく何かやるんだったら、そういうものをつくらないといけないし、みんなも面白いと思わないでしょう？



東京キャラバン in 東北

日本全国津々浦々をキャラバンする第一歩として、2016年9月に開催。リオから帰国したばかりの東京キャラバン参加アーティストや松たか子氏が宮城・福島を訪れ、地元の小学生、吹奏楽部、伝統芸能やお祭の担い手などと、新たな表現を創作するワークショップを行った。



photo_tsukao / text_kentaro inoue

嫌いなところばかりだけど一番好きな街、東京。

僕、長崎で生まれて4歳で東京に出てきて、それから55年ずっと東京にいるから、文句を言いながらも、この街が好きなんでしょうね。いいところ？ うーん、嫌いなところはいっぱい浮かぶけど……。たとえば、ファーストフードの店の前を通ったときの匂い。みんなタバコはあんなに嫌っているのに、なんでファーストフードの匂いは嫌わないの？

街で大音量で音楽をかけられるのも嫌だし、「〇〇セール」なんて書いてあるノボリも嫌い。あれ台無しにするじゃない、街並みを。東京オリンピックにしてもなんにしても、すぐノボリ。でも、外国人はノボリがブワーって並んでいるのを見ると喜ぶんだよね。あとは、居酒屋の提灯も（笑）。だから一概に悪いとも言えないんだよなあ。

東京は好きだし面白い、それは自分が育ったから。結局、当たり前なんだけども、根性が日本人なんです。もちろんヨーロッパの街もすごくすてきだし、ロンドンやパリにしても、よくこれだけ建物を守るなっていつも感心します。だって、新しいものをつくらうとしたら、色合いから何から全部、寄ってたかって周囲が文句を言うんだから、すごいですよね。じゃあ何も新しいものをつくらないほうがいいのかっていうと、そうとも言えないから、また難しい。

かつて六本木は、新劇の中心だった。

六本木ヒルズができてからはあんまり行かなくなったけど、六本木には俳優座があって、かつて新劇の中心のひとつだったんです。そういえば学生のとき、俳優座劇場の舞台に1日だけ立ったことがあるのを思い出しました。ひどいアングラ劇団の公演で、なぜか街宣車が来

ちゃって、企画したわけでもないのに一番先頭に立たされて、街宣車からかんしゃく玉を投げつけられた（笑）。

まだ無名の風間杜夫さんや大竹まことさんが出ている好きな劇団があって、その公演を手伝ったこともありました。雪を降らせる仕事だったんだけど、やったことがないから下手くそで、演出家からすごい怒鳴られて。他にも、今はなき自由劇場で、橋爪功さんと二人芝居をやったこともあったし、実は六本木にはいろいろ思い出がありますね。

若いときには勘三郎なんかと飲み歩いたりもしたし、北京ダックを初めて食べたのも六本木通り沿いの中国飯店。あとは、なんといってもアマンド、あの交差点のあたりが僕にとっては永遠の六本木です。



俳優座劇場

1954年、戦災で消失した新劇の拠点「築地小劇場」に代わる劇場を、という演劇人の要望を受け、六本木交差点にオープン。総席数は300席で、自主プロデュース講演のほか講演会などにも使われている。

六本木のほかの場所でも、転々とキャラバンを。

やっぱり六本木って、みんなが圧倒的に「現象の最先端」であると思っている街だし、外国人の友だちに聞いても名前を知っている。文化的な意味においても、とてもいいポジショニングの街だと思うんです。

その一角を使って、今回キャラバンができるのは嬉しいし、（福島県の）相馬市のあとが六本木っていうのもギャップがあって面白い。やってみて反応がよければ、来年以降いるんなところを転々とできたら。それこそ六本木のほかの場所、東京ミッドタウンの芝生なんかでもやってみたいですね。ま、貸してくれたら話だけでも。

アートナイトに来る人は、日本代表が好き!?

これは偏見かもしれないけど、アートナイトに来る人って、サッカーで日本が勝ったり、ハロウィンのときとかに渋谷に行ったり、騒いだりしてるやつらと同じじゃないかなって。そういう人たちの前ではあんまりやったことがないから、奇妙にも楽しみなんです（笑）。

そして、そんなことを言いつつ実は僕も、2002年のワールドカップのときには、事務所に内緒で翌日のロンドン行きの予定を航空会社に電話して延ばして、埼玉スタジアムまで日本代表の初戦のベルギー戦を観に行っただけです。日比野克彦さんから「青い服着てないと、絶対浮くよ」って言われただけど、「青い服持ってたって絶対着ないよ」なんて普通の服で行って浮きました。だけど点が入った瞬間、立ち上がって、知らない人とやったー！って抱き合った（笑）。

あの内側から湧き出るナショナリズムは、恥ずかしいけれどすごかった。

面白い人間がつくる空間はやっぱり面白い。

最終的には、場所や空間そのものよりも、人の問題なんじゃないかな。だって、面白くない人間は面白くない空間しかつけれないから。面白さとは、ただ笑えることを言えばいいっていうんじゃなくて、あんまりしゃべらなくても面白い人っているでしょう？ 無口で気味悪がらせるだけでもいい。そういう人がつくるものはやっぱり面白い。

みんなに文化に興味を持ってもらうにはどうしたらいいか？ それは教育の問題なんじゃないですか？ きっとキャラバンみたいなものが増えて、クオリティが上がっていけば、簡単にそうなると思いますよ。でも、本気でやろうとしたら、文化にはめちゃくちゃお金がかかる。そういうものにちゃんと投資するんだという気持ちがないとできないでしょう。

最近オリンピックの話になると、なんでそんなに金を使ってるんだ！ ってネガティブに言われがちですが、問題は金額の大小だけじゃなくて、それに見合うだけのものをつくれていないこと。そういうときにお金をむしり合うんじゃなくて、ふだんから文化で稼がないといけないうすよね、僕らは。

役に立つものだけに価値を求めるな。

街にしても、言葉にしても、今の時代は、役に立つものだけに価値を求める方向に戻ってしまっている気がします。1960年代とか70年代には、そういう風潮を壊すためにナンセンス、いわゆる不条理な詩が登場しましたよね。当時は、詩の雑誌なんてものが若い人に売れてたわけだから。それが今、役に立たない言葉とか、お金になりにくい言葉には、みんな価値を求めないじゃないですか？

かといって言葉は、伝わらないのに使っても仕方ない。昔は、舞台上で不条理な詩を使っても伝わりやすかったし、記号みたいなものを面白がって解釈しようとしていた。そういう意味では、演劇は今、言葉の最後の牙城になってはいるんですね。

だから、子どもと同じくらいの気持ちで、言葉を評価するといいのかもね。子どもなんて一番、ナンセンスな言葉大好きじゃないですか？ 「うんち」って言うだけで、ずっと笑ってるわけだから。そういうものが大事な気がするな。だから、うんちを否定しないこと（笑）。

取材を終えて……

今回のメイン写真は、六本木ヒルズアリーナで行われた「東京キャラバン in 六本木」のリハーサル当日に。名和晃平さんの彫刻「White Deer」や「Ether（エーテル）」、そして前回インタビューに登場してくれたプラントハンター・西島清順さんが手がけた森をバックに演出する野田さんを撮影しました。（editor_kentaro inoue）